群青かわら版

発行所：東京都調布市調布ヶ丘1-5-1
学友会室
群青編集委員会
(c)群青編集委員会
2005

新入生宿泊研修レポート

学科別新入生宿泊研修。毎年四月に行われるこの研修は、入学間もない電通大生が経験する初めてのイベントです。

全く知らない人達ばかりという新しい環境において、この研修は一種の転換点となってくれます。現在の友人関係が、この合宿をきっかけに広がっていったという人も多いことでしょう。もちろん、研修の目的は友人をつくることだけではありません。研修先で観光をするのも良し、教授や院生から大学についての話を聞くのも良し、飲んで騒いでワイワイ過ごすのも良し。

今回は、そんな学科別研修の様子を、群青編集委員会の一年生が報告します。

研修その１

快晴の空の下、私達F科を乗せた四台のバスが長野県の蓼科（たてしな）に向かって走り出しました。新入生宿泊研修、またの名を「友達無理やりでもいいから作っとけ合宿」の始まりです。

まずはバスに揺られることおよそ二時間、釜飯の店「おぎのや」に到着です。朝食を食べ損ねた人達も十分に満足できる量と美味しさで、みな食べ過ぎてしまったようでした。

再びバスに乗り込み、それぞれ思い思いの時間を過ごしていると、茅野市総合体育館に到着しました。そこではかの有名な？ドッヂビーが行われました。ドッヂビー……それはおよそ十年前より続く電気通信大学F＆H科の名物競技なのです。

ルールは簡単で、フリスビーでのドッヂボールです。簡単そうに思える競技ですが、フリスビーはボールと違い柔らかいため、しっかり握らないと回転によって弾いてしまってすぐに当たってしまうようです。そして、チーム編成を経ていよいよ試合開始。初めての競技とあって、最初の方はフリスビーの速度も避け方もいまいちでしたが、回を重ねるごとに慣れてきて、裏向きで投げるなどの工夫が見られました。試合結果は全敗したチームがある一方で全勝したチームもあり、適当なチーム編成が窺えました。

受験戦争でなまった体を目一杯使った私達を乗せ、バスは今日の宿へと向かいます。ふとバスの中を見回すとみな眠り込んでいました。宿に着いて早速部屋に行くと、そこには初めて会う学友が待っていました。軽い自己紹介や雑談などで必死に友人作りに励み、緊張もほぐれてきたところで夕食の時間です。質・量共に豪華の一言に尽きる食事に誰もが満足の様子でした。

食事後には学科紹介のガイダンスを学科ごとに受け、いよいよお待ちかね？の就寝時間。良い子は寝る時間です……が、そのまま夜は更けていきます。明け方まで……むしろ朝食まで。

二日目も天気は良好。朝のバイキングを済ました私達はバスに乗り、野辺山国立天文台へ向かいました。昼食までの時間潰しのため、たいして面白いわけでもなく、ふらふら歩いてる人やさっさとバスに戻る人達ばかりでした。

昼食は牧場でバーベキューとあって、食べる気満々な雰囲気の人も見受けられました。そんな思惑とは裏腹に、肉を圧倒するもやしが彼らのお腹を満たしていきました。食後のデザートはアイスクリームです。といっても、ただ食べるのではなく作って食べるのです。アイスクリーム作りは意外と大変で、みんな顔を真っ赤にして作っていました。アイスを食べるのでちょうど良かったかもしれないです。自分達で作ったアイスの味は美味しかったです。

これにてF科の新入生合宿研修のイベントは終了です。この合宿が大学生活を楽しく過ごすための友人をつくれる機会となったので、大変良かったと思います。（文責　真鍋）

研修その二

私達C科は、今回の合宿でソバ打ち体験と遺跡見学をしてきました。

まずは、ソバ打ち体験を白樺高原のスキー場にある小屋で行いました。ここはかなり標高が高い所なので、四月中旬だというのにまだ雪が道路わきに積もっていました。しかしソバを打つためには涼しい気候が適しているということで、冷水で手を洗って服の袖をまくり、両腕に寒さを感じながらそれぞれの持ち場に向かいました。

事前に決められていた班に分かれて簡単な説明を受けた後に、早速ソバ作りを開始。まずはボールの中にソバ粉と小麦粉を入れ、さらにぬるま湯を加えてよく混ぜ合わせる作業。この時、粉がなるべく大きな塊になってしまわないように素早くやるのがコツだそうです。しかし、ソバがつきたての餅のように手に張り付いて上手く散らすことができず、少々手を焼いた班もあったようでした。

そのまま粘り気が出るまでかき混ぜ、水気がなくなってきたらボールから出してテーブルの上で押しつぶすように練っていきます。十分練ってソバの生地が徐々に粘土のようになってきたら、生地を泥団子のように丸めてテーブルの上でつぶし、円状にしていきます。そしてさらにノシ棒で均等の厚さになるようにならして、薄さ二ミリまで引き伸ばしていきます。この「均等の厚さになるように」というのがとても難しいものでした。左右の手の力を均等にしなければ凸凹になってしまうし、やりすぎると生地がちぎれてしまいます。また、動作が遅すぎると生地が乾いてパサパサになってしまいます。素早く慎重な作業を求められて、だいぶ苦戦しました。

生地を十分に引き伸ばしたら、三つ折か四つ折にして隅から短冊状に切っていきます。幅十センチ程度とはいえ、麺の細さが上下同じになるように切ってゆくのは意外と集中力を要する作業でした。ソバ作りというものは本当に根気がいる作業だということを改めて感じました。

色々な苦労を経て、やっとソバが完成。さっそく指導者の方々に茹でてもらい、試食兼昼食としていただきました。麺がやや短かったですが、ちゃんとソバの味がしました。面白半分で通常の三倍の太さに切った麺を作ったので食べてみましたが、十分に茹であがっておらず、味は生の小麦粉でした。

続いて私達は国特別史跡「尖石遺跡」の発掘物を中心に展示してある尖石縄文考古学館を見学してきました。この博物館のすぐ隣にある尖石遺跡は、山すその中にある森に囲まれた小さな集落の遺跡で縄文時代中期の遺跡と見られており、縄目の跡がある土器や多くの矢尻、土偶などが発見されています。「尖石」というのは遺跡近くの山の斜面にある先の尖った長さ一メートルほどの大きな石のことを指し、その昔、縄文人がこの石を用いて石斧を研いだと言われています。しかし、一部の学生には「尖石とか呼ばれているくせに全然尖っていない」とやや不評のようでした。

この博物館には、尖石遺跡以外にも、中ツ原遺跡や長峰遺跡といった周囲にある様々な遺跡の発掘物が展示されています。特に棚畑遺跡から発掘された土偶は「縄文のビーナス」と呼ばれ、国宝に指定されています。さらにこの博物館には縄文時代の暮らしを体験するコーナーがあり、麻でできた服や石で作った飾りを身に付けている学生や、火おこし器で熱心に木くずをくすぶらせている学生もいました。

この展示室には、他にも土器に模様をつける縄や、石器を作るための打ち石、土偶の型などが棚にたくさん並んでいました。ちなみに『神様一〇〇個入り』という文字がプリントされたダンボールもありましたが、中身を調べることができなかったので、結局その中身は謎のままです。

行きのバスの中では沈黙が続きバスガイドさんを困らせていたC科でしたが、懇親会や寝室での雑談、そしてこの二つの体験を通して、気の合う友人たちを見つけられたようで、帰りのバスの中では「みなさん、楽しめましたか?」というバスガイドさんの質問に威勢の良い返事が返ってきました。

この旅行が、これから大学生活を共にする仲間と出会えた機会として思い出になったと思いますし、他の仲間にとっても、そうあってもらえればよいと思います。(文責：岸本)

研修その三

・・・・・・・・・・・・・・・

さて、最初のページで「新入生宿泊研修レポート」の見出しとともに始まった群青かわら版第一号ですが、唯一一学科、これに異を唱えんとする学科が存在することでしょう。

他の学科の学生は、バスで出掛け、旅館に泊まり、日常ではできないようなことを体験してきます……が。この学科はバスにも乗りません。旅館にも泊まりません。滅多に経験できないこともしません。むしろ行われるのは講義だという現実。

半ば伝統と化しているので、もはや宿泊研修は潔く諦めた方がよいかもしれれません。

・・・・・・・・・・・・・・・

せっかくだから、

俺達はこの電通大に残るぜ！

・・・・・・・・・・・・・・・

その日電通大に到着すると、何台かのバスが停まっていました。楽しい宿泊研修へと向かう大勢の新入生を待っているのです。しかし、その光景は新入生であるはずの僕らには全くの無関係でした。なぜなら僕らは、J科ですから……。

というわけで、J科の新入生学内研修の模様をお伝えします。場所はその名の通り電通大構内ということで、もちろんバスなんて必要ありません。見せつけられるのはつらいのでどうにかしていただきたいと思います。

西九号館に集合してまず始まったのはオリエンテーション、学内研修の解説でした。このJ科学内研修はここ何年か続いており、その度に学生にアンケートを取っているそうです。結果は学内派と学外派が半々ほどで、これを参考に学内研修を続けているということでした。信じられません。

次にカリキュラム紹介。ここ一週間授業を受けてきていたので、正直いまさらという感が……。

続いては研究室公開です。J科内にある四つの研究室の中から、それぞれの研究室を四つのグループに分かれて、ローテーションを組んで見ていくというものです。

角田研では、計算機を複数繋いで高度な処理をさせる研究、山本研では、計算機の計算結果の誤差を少なくする研究。その他、先輩方の研究発表などもがありました。難しくてまだよく分からなかったのですが、早く理解できるようになって、先輩方の様な立派な研究をしてみたいと思いました。

また、他の二つの研究室は、研究室の見学ではなく講義形式でした。興味のある分野の研究成果を見ることができ、分かりやすく解説してもらえます。また研究成果だけでなく、研究生活の様子なども直接聞くことができました。入学してすぐに研究を見る機会があるというのは、学内研修の強みではないでしょうか。

ちなみに、研究室公開の合間に昼食時間がありました。筆者は西食堂で食事をとりましたが、工事の作業員の方と一緒の食事となりました。これもJ科ならではと言え……ませんね。

午後からは、まず計算機実習を行いました。大半の人が初めて触るであろうLinux、普段Windowsしか使わないせいかやはり使いづらいのですが、使った感じはなかなか良いので早く慣れたいところです。最後の方では、タイピングソフトを使ってタイプの練習をしましょうということになりました。部屋中がカタカタという異様な音に包まれる中、記録を更新する人が続出。慣れている人の速さはあり得ないほどです。

その後、十三のグループに分かれて行う基礎セミナーを受けました。担当教官が独自に講義内容や形式を決めるので、グループによって中身は全く違うようです。

最後は生協食堂に集まっての懇親会です。一斉に乾杯してからテーブルに並ぶ様々な料理や飲み物を味わい、一通り食べ終わった後は一本締めによる中締め。その後はそれぞれ歓談をして楽しみ、入学して一週間程度とは思えない盛り上がりとなりました。焼きおにぎりが冷凍食品のようだったのは気にしないでおきたいと思います。

学内での一日研修でしたが、これはこれで有意義なものになったのではないかと思います。他学科の宿泊研修にも劣らないはずです。……きっと。あとは、私達もアンケートを書いたので、来年の新入生こそ宿泊研修に行けるのかどうかを楽しみにしています。（文責：前坂・生山）

旧委員長挨拶

三年情報通信工学科の岩城です。平成十六年度の体制が確立してから一年間、ただひたすら走り抜けただけといった感がありますが、何とか委員長の仕事をやり終えることができました。お世話になった方々に改めて御礼を申し上げたいと思います。そして脱中間管理職おめでとう、自分。

人数が少なかった自分達の世代とは一転、去年度はメンバーが大量に追加、それも実力派揃いということもあって、委員長の負担も比較的少なくやっていくことができました。外にぺこぺこ頭を下げている傍らで、みるみる（**ある意味で**クオリティの高い）原稿が生成されていくという当時の状況は、驚きを通り越して脅威すら感じたほどです。むしろ委員長の方が足を引っ張っていたのではないかと心配になったりならなかったりしました。

今年度は彼等が名実共に主力として活躍するということで、楽隠居ができてほっとしています。何といっても、去年の春に特集案として「災害」を出してきたのは彼等です。それだけではありません。ハイクオリティなロゴをデザインしたのも彼等です。面白い、時にぶっ飛んだコラムを大量生成したのも彼等。編集後記のあの背景画像をコラージュしたのも彼等。非常食試食会に米軍のレーションを持ってきたのも彼等。大丈夫、もう私は引退済み。今年は手綱を握らなくていいんだ。……手綱を握っていた去年、彼等を御しきれていたかどうかはまた別問題ですが。

ということで、ここまでつらつらと書いてきたわけですが、実はこの挨拶文、**また**手をつけるのが〆切当日午前二時となってしまいました。傍らにはいつも通り飽和コーヒーがセットされています。毎回「筆が遅すぎ」と言われ、圧力をかけられてはいましたが、今回はとうとう「実は仮〆切ぶっちぎってますから」と新委員長に怒られてしまいました。「上がヘタレだと下はよく育つ」とはよく言ったものです。

それでは今年度も、新体制になった群青編集委員会をよろしくお願いします。

新委員長挨拶

今年度の委員長になってしまいました、二年情報通信工学科の堀江です。一昨年はあみだくじ、去年はなし崩し的に選出が行われたらしい群青編集委員会の委員長ですが、今年はしっかりとした話し合いの結果決定しました。ただし、

『十四時二十五分から来年度の役職決めます』

という内容の連絡メールが回ったのは同日十四時二十分でしたが。

正直、私のような「まっとうな」人間に群青編集委員会の舵取りが務まるかどうか、不安がないと言えば嘘になります。優秀な戦力でありながら強烈すぎる個性を持つ同期のメンツ、今のところその能力全てを晒してはいませんが、間違いなく私を戦慄させるモノを隠し持っているであろう一年生達、そして正直胸焼けしそうなほどの伝説を残し、今後も生み続けるであろう先輩方。

ですが信じて下さい。私は闘います。彼らの手綱をしっかりと握り……えっと、とりあえず振り落とされないように気をつけながら頑張っていきたいと思います。

実際新委員長とは言いましても、まだまだ経験不足のひよっこであることも事実です。実はこの挨拶も「新体制一発目の挨拶でここまで本性出すのはマズい。」と元老院先輩からお叱りを受け、ヒーコラ言いながら書き直したものだったりします。今期の委員長としましては、そんな上の声をきちんと受け止めて今後の課題にするとともに、読者の皆様によりよい文章をお届けできるよう委員全員一丸となって精進し、この一年間を乗り切っていきたいと思います。

編集後記

新編集長としての初仕事、無事に終えることができました。今回は一年生全員に研修レポートを書いてくるようにとの指示が出されていましたが、紙面の都合上、流石に全員分を掲載することはできませんでした。これほど原稿が集まるとは予想しておらず、委員一同嬉しい悲鳴を上げていた一方で、私は仕事が増えて悲しい悲鳴を上げていました。